

## 陽の名残り

大森康宏

六甲山系の南麓を走る阪神高速下り線には、長い渋滞の帯が出来ていた。須磨アルプスから見下ろすと、それは、びっしり並んで動きを止め、先頭からの指令をじっと待っている大きな蟻の行列のように思えた。陽炎が立って、遠くまでは見晴らせぬが、車の列は、明石の西の端まで続いている様子である。海から吹き上げる風に乗り、時折、微かなクラクションの音が聞こえてくる。音は、蟻たちのあげる苛立ちの声だった。

九日間の大型連休となったゴールデンウィークは、連日青天に恵まれ行楽地はどこも芋を洗う状況、と昨夜のテレビが伝えていた。映像でも、画面いっぱいの人や車があふれ、その混雑ぶりは、明日から出かけようとする人間を尻込みさせたらう。

「やっぱり遠出はよそう」大江伸介は、テレビを見ながらそう決め、近くの六甲山系を歩くことにした。山仲間の渡辺恭平を誘うと、彼も同じ考えだったらしく、電話の向こうで、行こう、と即座に言った。六甲の西の端から須磨アルプスに登り、歩けるところまで歩く、という気軽なコースがその場で決まった。

身近な場所に、好きな時いつでも登れる山があることを、伸介は有り難く思う。五十歳から始めた山歩きも、今年でもう八年になる。その間、六甲山には随分と世話になった。県の山岳連盟が主催する「六甲山クリーンハイク」には、欠かさず参加してきた。毎月第一日曜日、ハイカーの捨てた空き缶や弁当箱、たばこの吸い殻等を拾いながら、摩耶山頂まで歩く。六甲を少しでもきれいにしようという、山男の義務感のようなものに駆り立てられた、ささやかな行動だった。日本人ハイカーのモラルの低さには、目を覆うものがある。ゴミを拾う度に、

ため息が出た。

「大江さん、ごらんよ、あの渋滞。きつと明石・姫路あたりまで続いてるよ。まるで動いてないもの」渡辺がリュックを背負いながら言った。朝の十時をちよつと回ったばかりだが、日差しはもう高い所にある。

須磨アルプスの痩せ尾根を挟んで、左右に切れ込んだ谷が広がる。岩肌の斜面に瑞々しい新緑が燃え、濃い緑との濃淡を鮮やかに染め上げている。谷の上空を鶯が二羽、悠々と泳いでいた。それは、羽を広げたまま、ゆつたりと空に浮かぶオブジェだった。都会の真ん中にこんな自然のあることが、東京育ちの伸介には信じられなかった。

「排気ガスにあおられながら高速道路で動けない、下界は大変なことになってるね。やっぱり山に来てよかった」そう言うと伸介もタオルで額の汗を拭い、腰を上げた。

「少し早いけど、高取山で昼にしようか。あとのコースは弁当食ってから決めよう」

渡辺の提案に、そうしよう、と頷き、伸介は先頭に立って歩き出した。

馬の背を抜け、東山で一息入れた後、いったん市街地に降り高取山の登りに掛かる。取り付いてから三十分ほどで頂上に着いた。神社の境内からは、いま歩いてきたコースが一望できる。須磨の浦を背景に、鉢伏山・須磨アルプスの稜線が東に伸びている。北東の彼方に菊水、鍋蓋、摩耶山と、六甲山系の尾根が連なって見える。海をまたぎ、神戸と淡路島を結ぶ明石海峡大橋は、西の空に掛かる巨大な虹のように思えた。

「西の縦走をする時、いつもここから大阪湾を眺めるんだ。菊水の山頂もいいけど、俺はここからの眺めの方が好きだ」弁当を広げ、伸介が言った。いつものサケと海苔弁当である。渡辺もにぎり飯を頬張り、頷く。二人とも、弁当はいつも自分でつくる。亭主の山の道楽までは面倒見切れぬ、という妻側の言い分は、共通のようだ。

渡辺とは、県連盟に所属する山の会に入ってから知り合った。七十名の会員の中で同じ年ということもあり、妙に気があった。付き合い始めて、もう七年が経つ。最近、渡辺も伸介も近郊の山ばかりで、

六年前の北アルプス表・裏銀座の縦走を最後に、三千メートル級の長距離登山は手がけていない。鹿島槍ヶ岳の縦走を計画するのだが、いつも二人の都合が合わず、流れてきた。今年は人生のひとつの岐路を迎え、やり残した雑事を片づける意味でも、何とか実現したかった。

「なべさん、今年は行こうな、鹿島槍、絶対に行こう」

箸を動かす手を止め、渡辺の目を見ながら確かめるように言った。

「俺はオーケーさ、あんたがいつも駄目なんじゃないか。いつ、やるうか？今年だったよな、定年」渡辺もにぎり飯を置き、キャップに水筒のお茶を注ぎながら、聞く。

「九月だ、あと四ヶ月。早いもんだね、あつと言う間だ」

独り言のように言うと、伸介は、六、七、八、九と指を折った。やはり、あと四ヶ月、九月末には終着駅に着く。今の会社に入って十二年、干支がひと回りして、定年である。変わり映えのしない人生だった。楽しみにしていた芝居が、幕を開けてみると期待はずれの平凡な展開で、どこか裏切られたという気分似ている。

五十八歳の誕生日をもって定年とする、それが会社の規則である。退職日は三月と九月末日の二回、誕生日の後に来るどちらか早い日が離職の日とされていた。七月生まれの伸介は、九月三十日である。季節の変わり目で衣替えをするように、これまでいくつも会社を変わってきた。そのことが良かったのか悪かったのか、自分でも分からない。

後先を考えず衝動的に飛び出したこともあれば、思案の末に、辞めたこともある。人間関係の苦しさに耐えきれず、辞表を出したケースもある。いずれの場合にも小さな修羅場、葛藤があったように思う。その度に犠牲になってきたのは、家族なのかも知れない。

「あなたは破壊者なのよ、創っては壊し、創っては壊して、結局は何も残らないんだわ」

妻にそう言われたことがある。その破壊活動も、あと四ヶ月で終わる。妻の言うとおり、家のローン以外、何も残らなかった。俺の人生は逃げの人生だったのか、時折そんな風に思ったりもする。困難と向き合い、最後まで闘おうとしなかったお前は、臆病者だ、そんなもう一人の自分の声が聞こえてくる。

「それで、どうするの、十月から」

渡辺が聞いた。自営業の彼も、かつてはサラリーマンだった。まだ四十代後半で脱サラし、奥さんと二人、今はこじんまりとした居酒屋をやっている。「ろっこう」という、家庭料理が中心の店だった。開店当初は毎日お茶ひきで苦労したようだったが、なんとか固定客がつき、今は軌道に乗ったようだ。新開地の商店街を北に上がった一角で、伸介も月に二、三度飲みに寄る。

「まだ決めてない、一年ほど失業保険をもらうことになるだろう。やつと解放されたんだ、少しのんびりするよ」

解放された、それは、実感としてあった。これからは自由だ、という内からの声が聞こえる。もうネクタイをしめ、八時二十分の電車に乗らなくともよい。いつも同じ電車に乗り合わせる連中の顔をみなくともよい。毎朝会っても、いちども口をきいたことのない同業者たち。彼らは、伸介を見かけなくなっただことに気づきさえしないだろう。反面、たがを外された生活は途端にリズムを失い、失速し、ストレスのないストレス、という新たな外敵が現れるかも知れない。

あの皇帝ペンギンはどうだろう。急にいなくなった伸介を、ホームできよるきよる探すだろうか。両手でバッグを持ち、いつも真っ白のセーターに黒のパンツ・スーツを着た皇帝ペンギン。彼女のスカート姿は見たことがない。つんと振り返るように姿勢を伸ばし、身じろぎもせずに海を見つめてホームに立つ。毎朝同じ駅で乗り、同じ駅で降りる。フロアは違ったが、ビルも同じだった。伸介は山側から、ペンギン女史は海側からの階段を上ってきて、改札口で鉢合わせする。目があったら会釈しようかと相手の視線を探るうちに、いつの間にかタイミングを逃している。ペンギン女史も伸介を意識しているのか、視線が合いそうになるとふっと目をそらす。密かに渾名をつけてからというもの、その女性が妙に気になった。四十代前半だろうか、同じ町に住んでいることは確かだが、朝の通勤時以外に出会ったことはない。ちらと端整な横顔を盗み見る、それが通勤の楽しみでもあった。「大江さん、誕生日はさんで十日ほど行こうよ、七月だったよな、誕生日」「知らない、ペンギンとは喋ったことないんだ」「ペンギン？」

渡辺がきょんとして伸介の顔を覗く。あつ、と苦笑した。

「別のことを考えてた。七月だよ、七月二十日」

「丁度いい、二十日が海の日だからそれをはさんで一週間。十九日に出発しよう。扇沢から針の木に登って鹿島槍、五竜、白馬と縦走する。最後は蓮華温泉に降りよう。蓮華で打ち上げだ」手帳を繰りながら早口に言う渡辺に、よしそれで行こう、と伸介は頷いた。

「そうと決まれば早速トレーニングだ、今日は頑張つて市が原まで歩くよ」

渡辺が水筒のお茶を一口飲み、弁当を片づけ始める。伸介も弁当箱をしまい、立ち上がった。十一時半を回っていた。

リュックは軽かった。精々七、八キロだろう。鹿島槍の一週間の縦走では、着替え、雨具、食料、水その他細々としたものを詰めると、小屋泊まりでも六十リッターのリュックがいっぱいになる。十五キロにはなるだろう。

高取山を降りて丸山を抜け、菊水山から有馬街道へ急降下して、また鍋蓋山に登るというきついアップダウンを繰り返し、市が原の天狗茶屋にたどり着いた時には、もう四時を過ぎていた。そこが下山地点で、やっとビールが飲める。山行中はアルコール禁止、それが会の規則だった。

がらりと戸を開け、店に入った。

「あら、いらつしやい。今日は遅かったね、お二人とも」

去年連れ合いを亡くし、女手一つで店を張っている。渡辺も伸介も、天狗茶屋とは馴染みだ。

「おばさん、まだ生きてたな。ビールだ、大きいの」

渡辺が勝手に冷蔵庫を開け、冷えた缶ビールを二本取り出す。棚に並んだピーナツ、塩昆布の袋を開ける。外のベンチに四、五人のハイカーが座っているだけで、店の中には誰もいなかった。

「連休で忙しかったやろ。大変だね、一人で」

茶屋の親父はまだ若かった。心臓に持病があるとかで、いつも二ト口を持ち歩いている、とおばさんに聞いた。昨年のちょうど今頃だった、急な発作であっけなく逝った。彫りの深いきりつとした面立ちは、歌舞伎役者のような男まえだった。まだ五十代に見えたが、七十二と

言われ、渡辺と顔を見合わせた。

「なべさん、今日ぐらい腹立つたことあれへんがな。ちよつと聞いてな」

いきなりまくし立てる女あるじの話しに、思わず引き込まれた。

大阪から来たハイキング団体三十名ほどが店に寄り、店の前に引いた水道栓のキーを貸してくれと言う。神戸市がキャンプ用として備えた施設だが、その管理は茶屋に任せられ、屋主がキーを預かっている。

「おばちゃん、豚汁すんねん。川の水でもええねんけど、水道あるんやったら、使わしてもらうわ。キー貸してな」

このひとことで切れたらしい。市が原の真ん中を流れる生田川は、飲料水としては使えない。知りながら、そう言った。

「ほな、川の水使ったらええがな。あんたらには水道より生田の水が似合いじゃ。キーなんぞ絶対に貸さへん。二度とここにも登って来さらすな、どあほ！」

と啖呵を切った。川の水といっしょくたにされ、水道を守る茶屋の主としては、プライドを傷つけられたのだろう。

「悔しゆうて悔しゆうて。お父ちゃんがいてたら、あいつらど突き回しとったわ、ほんま。山登りの仲間にも、あんなおるんやな」

「そらおるわ、登山人口一千万。いろんなんがおるぞい」

渡辺が相づちを打つ。プルトップを起こし、互いの前途に、と伸介の缶にぶつけた。前途に、と伸介も缶を上げる。

「せやけど、えげつないやつちな。川の水でもええ、ちゅーんは一言多い」

渡辺が言った。伸介との会話は関東弁、器用に使い分けるのが面白い。

「あんとこの会に入れて教育したり。ゴミハイクさせたら少しは変わるやろ」

怒りを二人にぶちまけ、女主はいくらか気分が納まつたらしい。

「おばさん、もう一周忌やな」渡辺の言葉に、ゆつくりと頷いた。

「こないだ、お寺さん来てもろたとこや。早いもんやな。店閉めてからお風呂入る、言うて風呂場で倒れたんや、それつきり。医者も救急車も間に合わなんだ」

「心臓発作で」

「二ト口、飲む間もあれへんかった」

彼女ももう六十半ばを過ぎている。今後ひとりでこの茶屋を切り回していく積もりか。市が原は六甲縦走の中継地点で、ここを起点に東西に枝分かれし、変化に富んだコースが開けている。広々とした河原で、水もトイレもあり、キャンプやバーベキューには理想的な場所と言えた。茶屋は三軒あるが、水場の真ん前の天狗茶屋に、自然と人は集まった。三宮から歩いても一時間足らずで登ってこられる。六甲銀座の四丁目交差点、それが天狗茶屋だ。早朝登山やキャンプ客、家族ハイクで集まってくる人間の落とす金は、小さくはなかつたろう。中高年を中心としたハイキングブームで、茶屋の利権はプレミアムがつき、最近では投資家のポートフォリオにも組み込まれている、と聞いた。その茶屋の切り盛りは、女ひとりでは無理だ。

おばさん、子供は、と伸介が聞いた。

「息子と娘、ちゃんと二人あるよ。息子は東京でサラリーマンしよる」  
「娘さんは」

「神戸や。元町の出版社にお勤めしよるわ」

「それやったら、手伝って貰いなよ、娘さんに。週末だけでも来てもらたらおばさん、ずいぶん助かるやろに」

「来るかいな、こんな山んなかに。月末から、高校生が一人きてくれるんよ」

「大江さん、しばらく手伝ってやれよ」この人九月で定年なんだ、と渡辺が伸介の顔を見ながら言った。

「あんたらみたいなの高給取り雇うたら、店つぶれてまうわ」

女主を交えた世間話はずみ、テーブルの上には大小六本の空き缶が並んだ。そろそろ下りるか、と腰を上げたときには、もう五時を回っていた。あと二日で九連休が終わる。長いような短いような、中途半端な休みだった。あと四ヶ月。四ヶ月経ったら、果てしもない休みの連なりである。

「おばさん、六月のクリーンハイクでまた会おう。元気で」

いい頃合いにビールが回り、伸介は靴のひもを結び直して立ち上がった。

対岸の山の緑が、燃えるような瑞々しさで目に突き刺さった。

一一

パソコンのメールを開くと受信あり、の表示があった。神戸商工会議所からのセミナー参加の呼びかけだった。最近の中国ブームを反映した、中国進出のノウハウセミナーである。そのまま削除し、電源を切った。時計を見ると六時半だった。誰もいなくなった二十坪ほどのオフィスを見回し、伸介は大きな伸びをした。金曜の夕ぐれ時、辺りはひっそりとしている。

県庁に近いこのオフィスは、周りに兵庫県公館や赤煉瓦のホテル、マンションが立ち並ぶ閑静な一角にある。東は中学校のキャンパスに面し、北側にカソリック教会、県庁ビル、兵庫県警察本部があり、両側にクスノキを植えた県庁の坂を北に上ると相楽園、六甲山系の諏訪山神社で、大師道から再度山に通じるハイキングコースが開けている。オフィスから南へ五分下れば、JR・阪神元町駅だ。電車の音に混じり、時折、神戸沖を行く客船やタンカーの霧笛が聞こえる。オフィスからは、摩耶山頂の一角が見えた。家からドア・ツー・ドアで四十分、恵まれた職場環境である。東京や大阪のラッシュ通勤に較べれば、これ以上の贅沢は望むべくもない。今になって初めて、それを感じる。

ここへ通い出して十二年、今週が彼岸の入りで、あと十日もすればこの生活ともお別れだ。机の上の小さな置き時計が「チクタク、チクタクあと十日、あと十日」とカウントダウンを刻み、伸介を追い出しにかかる。狭い部屋で鼻つき合わせている十人ほどの部下、同僚達も、腫れ物にでも触るような仕種で、妙によそよそしく、伸介を無視して会話が飛び交い、伸介は、自分が部屋の隅に立っているキャビネットにでもなったような錯覚を覚えるのだった。

早いとこ消えよう、そう自分に言い聞かせる

五月に約束した鹿島槍ヶ岳の縦走は、結局渡辺恭平の都合で延期になった。夜行列車の切符は買ったのだが、出発の土壇場で渡辺が倒れ、緊急入院したため、計画は中止にした。あの頑健な渡辺が、とびつくりして病院に駆けつけると、心配したほどのことはなく、「ごめんごめん、とけるっ」として言う。



軽い脳梗塞だった。後遺症はないだろう、との医者の見立てで十日ほどで退院できたのだが、大事をとり、渡辺は一ヶ月入院してから自宅に戻った。今では普通に店を切り盛りしているようだ。

机の上のファイル、参考文献、辞書等には伸介の私物もある。これを家に持って帰るかどうか、思索している。机の引き出しの中は、相変わらず乱雑だった。サラ金のポケット・ティシュー、居酒屋の割引券、ちびた消しゴム、等が散乱している。それらをかき集め、まとめて屑籠に放り込んだ。書籍類は、迷った挙句に、研究社の「新英和大辞典・第五版」だけもって帰ることにし、ポストンバッグに詰めた。大英和は、十二年の手垢の重みを感じられた。

今日、二百枚の挨拶状が刷り上がってきた。午後から宛名を書き始め、先ほどやっと書き終えた。九月いっぱいまで退職する旨を告げ、在職中の厚誼を感謝する云々の、木で鼻を括った文章である。じっくり考えて草案を練る積もりだったが、終いに面倒くさくなり、やめた。幾つかあった模範文例を適当に選びそのまま印刷に出した。こういうものにどれほどの意味があるのか。葉書が着いて三日もすれば、自分の名前は抹消される。メールアドレスから消え、電話帳から消え、名刺も葉書も、ふたつに裂かれてゴミ箱行きだ。そのうち誰の胸にも影すらとどめないようになる。寂しい気もするが、自分も同じようにしてきたのだった。新陳代謝だ。古い細胞が死に、新しい細胞に生まれ変わる。それでいい、と伸介は思う。精いっぱい働いてきたのだ、悔いはない、そう自分に言い聞かせた。

二百枚の宛名の中には、同じビルにオフィスを構える取引先も何社があった。ホルダー三冊分の名刺を吟味し、持ち主の表情を思い浮かべながら書いていったのだが、名前と顔が一致しないもの、顔を思い出せないのつべらぼう名刺がけっこうある。十二年でホルダー三冊というのは、少ない方だろうか。一冊四百枚、千二百枚の中から選ぶと、ちょうど二百枚になったのだった。

帰りがけ、葉書をポストに投函したら、渡辺の店に寄ってみようか。サラリーマンの末期の酒は、どんな味がするだろう。そう思った途端、渡辺の顔が見たくなかった。声が聞きたくなかった。受話器を取り、番号を押した。三度目の呼び出し音で繋がった。

「ハイっ、ろっこうです」

渡辺の元気な声が響いた。後遺症は大丈夫だ。電話の向こうは騒がしい。

「大江です。賑やかだな」

「よう、ちょうど良かった。今三人来てる。あんたの話して盛り上がってるよ」

「三人て、誰だ」

「イノ、シカ、チヨウの三人。おいでよ、待ってる」

三十分で行く、と言って電話を切った。

「みんな来い来い、って訳だな」独りごち、腰を上げる。

そわそわと急ぎ足になる。阪神電車で新開地まで行った。路上に通じる階段が上がると、この町独特の匂い、喧噪が伸介をすっぽり包んだ。浅草口ツク映画街をほうふつさせる猥雑さ、地下鉄銀座線・浅草駅の階段を上がると待つている雷門の雑踏、それが伸介の郷愁をさそう。おふくろの腹の中にいるようだ、ここへ来るとそんな安心感を覚える。近いうちに墓参りに行こう、そう思った。

商店街を五分ほど北に歩くと、「ろっこう」と書いた赤提灯が見えた。引き戸を開けると、店はいっぱいだった。カウンターは若いサラリーマン風の男達が座り、五つのテーブルも全部ふさがっている。総勢二十人近い客が飲み、笑い、騒いでいる。ほっとした。

いらっしやいませ、と渡辺の奥さんが愛想良く迎えた。

「よう」一番奥のテーブルで、鹿取浩志の手が上がった。伸介も軽く手を挙げ、会釈する。右隣りが猪瀬真一、こちらに背を向け、グラスを手にしているのが吉兆るみ子。同じ山の会のメンバーである。鹿取は目の縁を朱に染めている。

るみ子の隣に座った。

「大江さん、甘えびのいいのが入った。食べるか」

カウンターの中から渡辺が聞く。いいな、生姜で頼む、と言った。

「もう退職金もらったの」るみ子の問いに、ああ、ごっそりもろた、と答えた。

「ほんで、どないするんや。どつかまた勤めるんか」

「なんで五十八やねん、中途半端やんか」

「ごっそりて、いくらもらったの。おせえてよ」

「熱爛にするか、それともビール」

「まずビールだ、と言ってグラスをもらう。るみ子が満たす。

乾杯、と四人がグラスを上げ、いっきに干した。

「うめえなっ。この一杯がたまらねえ。まさに千両ビールだ」

のどを鳴らし、二杯目を流し込む。ふーっと大きな息をついた。

「そんな、一度に聞かれても返事できない。一人ずつにしてくれよ」

ほな、るみちゃんから、と鹿取が言った。

「退職金、なんぼやて聞いてんねん」

「なんで、そないに人の銭が気になるんや。ごっそりもろた、言うてるやろ」

伸介も関西弁になった。まるでぎごちない。自分で聞いていてよく分かる。

「給料の一年分。十二年働いて十二ヶ月分貰ったよ。年にひと月の勤定だ」

それっぽっち、るみ子がグラスを空けながら言う。

「十二年の退職金なんて、そんなもんさ。これでもまだいい方だろう」

「五十八で定年、それが就業規則だ。今後はもっと早くなる、五十五とか五十とか、いずれそうなるだろう。退職金制度そのものがなくなるかも知れないし」

「来月からしばらくはサンデー毎日だ、失業保険切れるまでは働かないよ」

これでいいかな、そう言ってぐるっと三人の顔を見回した。

大江さん、と鹿取が顔を寄せ、伸介の目を覗き込む。

「会の運営、手伝うてくれへんかな。落ち着いてからでええ。大江さんに役員やつてもろたら助かる。あんたが来る前、三人でそのこと話しとつたんや」

七十名の会員を代表して十名ほどが運営委員として選ばれ、会の運営に携わっている。鹿取浩志は、その事務局長を勤めている。会三役の一人だ。猪瀬真一は自然保護部で毎月の清掃ハイクを担当、るみ子は会計だ。三人のなかでは、猪瀬とるみ子がまだ現役で仕事をしている。

「そうだな、何か手伝わなければ、と思ってたから、ぼちぼちやってもいい」

鹿取が身を乗り出し「機関誌、たのむわ」と畳み込む。

「わしらパソコンようせん。版下原稿こさえてくれたら、印刷はこっちでやる。編集した版下を印刷の前日までに事務所に放り込んでくれといいたらええ」

伸介は頷き、来年一月号から引き受ける、と言った。

「おおきに、大江さん。助かるわ」鹿取が嬉しそうに伸介の手を握った。

「事務局長、良かったな。優秀な機関誌部長さんが決まってよ」

渡辺が、笑いながらカウンターの中から声を掛けた。

奥さん、最近、なべさんの調子はどうです、大人しくしてますかと聞いた。

彼女は渡辺より三つ若い。店ではいつも着物で、実際の年齢より三、四才若く見える。それは、彼女と同年のるみ子にしても同じだった。十年ほど前に離婚し、子供二人を引き取っている。鉄火の姉御肌で、会の男性陣の間で人気の中心である。目下、複数の会員と恋愛中、との噂が流れている。

「大江さん、長い間ごくるうさまでしたね。お陰様で主人もこの通り、元気になって。また一緒に山へ行つてあげて下さい」

カウンターに入り、洗い物をしながら微笑む。いい夫婦だな、と思つた。

これからは、山の仲間とのつきあいが中心になるのだろう。利害関係のない彼らとは、気軽に交わえる。しばらくは機関誌の編集をやりながら、エッセーでも書いてみようか。これまでのサラリーマン人生を振り返り、文章にして総括してみるのも面白い。三人称でフィクション風に仕上げ、シリーズとして連載したら、ひと味違った山の会の機関誌ができる。そこから小説が生まれるかも知れない。ひよつとして、新しい人生の切り口が開けるかも知れない。定年退職も、まんざら捨てたものではない、そんな気がしてきた。

るみ子が注いだ熱燗の酒をコップに受け、伸介は、独り小さく頷いた。

玄関の明かりはまだ点いていた。里江はおきているらしい。ドアを開けるとキンコン、キンコンと防犯用のベルが鳴った。

里江が出てきて伸介を迎えた。

「まだ起きてたのか」

「いまお風呂はいったところ。お食事は」

「すませた。なべさんとこに寄って、三人組と飲んた」

「山の会の」

「イノシカチヨウ。来年から機関誌の編集やることになったよ。風呂に入る」

パジャマに着替え、風呂から上がってくると、里江はもういなかった。自分の部屋に引き上げ、ベッドで本を読んでいるのだろう。里江はよく本を読む。近所の小学校の市民図書室からごっそり借りだしてきて、あつという間に読んでしまう。まず結末を読み、それから本文に入る。ミステリーでそんな読み方をして、なにが面白いと思うが、ひとつひとつ地雷を処理するように、伏線を暴いていくのが楽しいのだ、という。

「変わってるよ」伸介も呆れ顔で言う。彼女と寝室を別にしてから、かれこれ五年になるだろうか。別々に寝ましよう、と末娘が使っていた四畳半の部屋に引き移っていった。伸介の欲求の強さにくらべると、八つ年下の里江は淡泊で、初めは応じていたが、それが次第に苦痛になってきたらしく、ある晩、拒絶された。力づくで押さえつけようとしたが、頑強な抵抗に遭い、果たせなかった。

「あちらで寝ます」

さつと枕を抱えて隣室に走った。それ以来、夜は別居生活だ。ダブルベッドに独り取り残された伸介は、屈辱感に打ちのめされた。シヨックだった。女房に拒絶された、その屈辱が言いようのない怒りに変わり、全身を締めくつた。

貴方とはベッドを共にしない、もう夫婦ではない、と宣言されたのである。

怒りは次第に増幅され、離婚を考えるようになった。もう二度と里江の肌には触れない、意地になり自分にそう言い聞かせた。

お前がその気なら、俺は外に女を作る、そう言つてのけた。

伸介の不貞腐れた言動は里江をさらに頑なにさせ、ぎくしゃくとした毎日が続いた。会話はなく、伸介は夕食を外で済ませ毎晩、遅く帰った。帰ると、電気はみな消えていて、ひっそりとした闇のなかに、自棄と虚無とがうずくまっている。実質、家庭内離婚状態だった。このままでは本当の離婚に発展する、そう思った。一時の感情で離婚は考えたが、それは本心ではない。ごめんなさい、里江のその一言があれば、俺が悪かったと謝り、和解するつもりでいた。そのきっかけがつかめなかった。拒絶されたあの屈辱感、澱のように心に沈殿していたが、話し合いのきつかけさえ掴めれば、もう一度やり直せる気がした。そんな心境を、ある日、渡辺にうち明けた。

「大江さん、五十になると、女性の身体は変わるんだよ。粘液の分泌が不活発になって、苦痛を伴うんだ。オイルの切れた状態でエンジンを始動させると、シリンダーは焼きつく、あれと同じさ。奥さんともう一度話してみるよ」

そう説明され、納得がいった。言われたとおり自分から折れ、里江と話し合つた。交接が苦痛を伴うのであれば、それはいたわりの目で見てやらねばならない。

ごめんなさい、と里江は言った。肉体的な苦痛ではなく、精神的なものだ、と言う。全面拒否ではなく、伸介の男としての生理もわかるので、「ほどほどに」とつつむき加減に小さく言った。性のボタンの掛け違いによる、互いの誤解で、話し合ってみれば、簡単に和解できるのだった。

以来、伸介が里江の寝室に通うようになった。以前ほどではなく、ふた月に一度か二度、里江は伸介を受け入れた。家庭内離婚状態は終わり、ぎくしゃくとした仲も、やがて元に戻った。ちょうど一年前の今頃だった。

今日は気分が高揚している。里江の部屋を訪ねよう。

冷蔵庫から缶ビールを一本取り、プルトップを起こした。白菜のお新香に唐辛子をふる。さくさくと美味しい。冷えたビールが喉ごしに心地よかつた。

里江の部屋の前に立つと、中から明かりが漏れている。まだ本を読

んでいるらしい。ひょっとして、俺を待ってるのか、そんな気がした。そつとドアを開ける。里江と目があった。薄い掛け布団を剥ぎ、パジャマの下から胸に手を伸ばした。温かく、柔らかい乳房が手のひらに納まった。抵抗はない。そのまま覆い被さり、パジャマの下を脱がせた。

「灯りを消して」里江がそつと言う。スイッチを切ると、カーテン越しに街灯の明かりが差し込んできた。パジャマの前をはだけ、唇から首筋、胸、腹へと舌を這わせる。

伸介は、両膝を太股の付け根の下に入れて状態を起こし、大きく里江の脚を開いた。里江も腰を浮かせ、応じる。いっきに入ろうとして、愕然となった。機能しないのだった。脳は興奮しているが、挿入できる固さにはならない。あせった。乳首を強く吸いながら両の乳房をのみほぐし、更に興奮を煽ろうとしたが、反応はなかった。一物は無惨に萎え、茹でる前のアスパラガスの先端のように小さくなっていた。こんなことは初めてだ。飲んでも風呂に入り、一時間もすれば里江と和合できたのに。俺はいつたい……。

布団を里江の上にかけると、裸のまま、逃げるようにして自分の部屋に戻ってきた。ベッドに潜り込んだ。目が冴えて眠れなかった。時計を見た。十二時半、日付が変わり、土曜の朝になっていた。惨めな敗北感が襲ってきた。

飲み過ぎだ。三人組と話が弾み、銚子を五、六本空けた。酔っていたのだ。この次ぎは必ずうまく行く、そう自分に言い聞かせる。大きなため息が出た。目を閉じると、今日投函した挨拶状の文言が脳裏に浮かんだ。

「九月三十日をもちまして定年退職いたすことと相成りました。在職中は、ひとかたならぬご厚情を賜り、厚く御礼……。」

### 三

ばったり、皇帝ペンギンに出つくわした。天狗茶屋の表のベンチに腰を下ろし、缶ビールを飲んでいるときだった。るみ子と鹿取の三人で青谷から摩耶山に登り、天狗道を市が原に降りてきた。穏やかな文化の日だった。山行中ずつとシャツをたくし上げ、陽にさらされた両

腕が微かに赤らんでいる。茶屋の前の楓が色づき始めていた。河原にはバーベキューを楽しむ家族連れやハイカーが群れ、時折風に乗れ、肉や野菜を焼く香ばしい匂いが運ばれてくる。

目の前に白い荷台の軽四輪が止まった。何気なくハンドルを握る女性を眺めていた伸介は、どこかで見た顔だなと訝りながら、あつ、と小さく叫んだ。隣のるみ子が、どないした、という顔で伸介を見る。思わず「皇帝ペンギン」とつぶやいた。

紺のジーンズにスニーカーを履き、黄色い टीーシャツの上から薄いカーデガンを羽織っている。通勤の服装とは違うが髪の色はいつも見慣れたショートカットで、荷物を下ろす度に反り返るようにつんと背筋を伸ばす。両手にハンドバッグを下げれば、紛れもない皇帝ペンギンだった。背後から視線を感じたのか、ゆっくり振り返った。目が合った。

「キンジロウ」と驚いたように口の中で言い、伸介を見つめる。

思わず立ち上がり、帽子を取った。

「あの、朝いつも駅のホームで・・・」軽く頭を下げた。はいつ、とペンギンも腰を折る。退職してまだふた月ほどだったが、妙な懐かしさがこみ上げてきた。

十二年同じ電車に乗り、同じビルに通いながら名も知らず、挨拶を交わしたこともない。駅ならぬ天狗茶屋の前で鉢合わせし、初めて口を利いた。薄化粧の頬に以前より少しやつれが見えたが、切れ長の二重まぶたは、毎日見慣れた大輪の花びらのそれで、端正な顔立ちに正面きつて見つめられ、伸介は一瞬、動悸が走るのを覚えた。

皇帝ペンギンが目の前に立っている。そのこと自体、信じられない気がした。

「なんや、あんたら知り合いだったんかいな」

茶店の中から出てきた女主が、二人を見比べながら言う。

「娘さんですか、元町の出版社にお勤めしてるという」

「せや。次の就職決まるまで手伝うてるとんね」

「就職？ あのビルに入ってる出版社というと、甲南出版・・・」

「九月末でリストラされたんです。五人ほどばっさり解雇されました。

出版界もこの不況で、仕方ありません」



つんとすまして人を寄せ付けない雰囲気だったが、接してみるとそんなところは微塵もなく、むしろ饒舌でさえある。勝手に想像していたことがおかしかった。声も美しかった。丸みを帯びた豊潤なトーンが、耳に心地よく響く。およそペンギンのそれではない。

「大江伸介です、お母さんとはもう七、八年になりますか」

「田所愛子です、いつもご利用下さって有り難うございます」

「同じ山の会の鹿取さんと、吉兆るみ子さん」

よろしく、と二人が会釈する。

「手伝いましょう」

伸介は荷台に乗ると、缶ビール、ジュース、菓子類の入ったケースを両手に持つ。腰痛めるで、と鹿取も手を貸す。

「あつ、すみません」田所愛子が、荷物を運び終えた二人に礼を言う。

「あの、キンジロウって・・・」伸介の問いに、くすつと笑う。

「いつも電車の中で本読んでらっしゃったでしょう。この方、何のお仕事してらっしゃるのかな、って気になってましたの。それで勝手に渾名をつけて。ごめんなさい」

薪を背負った皇帝ペンギン、絵にしたら面白い図柄になるだろう。

「実は、僕も九月で定年退職したところです。甲南出版にも挨拶状を出したと思います。そうですか、リストラに遭われて。失業保険貰ってるんですね」

「ええ。次のお仕事見つかるまで母を手伝うことにしました。同じ神戸にいながら、ほとんど実家に帰れなかったし。罪滅ぼしにと思って」

「そりゃいい、お母さんも喜んでますよ」

「おばさん、薪と缶ビールおくれ」若いハイカーが二人、店の前に立つた。

「愛ちゃん、裏から薪取ってきて。納屋に一輪車あるさかい、それ使って」

母親に促され、はい、と言って伸介に会釈し、裏に回る。若い張りのある声が辺りに響いて、天狗茶屋全体が活気づいたように思える。

「おばさん、良かったな。娘さん帰ってきて」

「もう四十二やで、あの子。リストラされて、結婚もせんと・・・」

これから先、どないする積もりやろ」裏のほうを見やりながら、不安

げに言った。

「何言うてんのおばちゃん。ちゃんと考えてはるわ。あたしかて独りやで。女の細腕突つ張らかして遅しく生きとんのに。年とか結婚とか、関係あらへんよ、心配いらん。本人の自由裁量に任しとき」

るみ子が慰めるように言う。女主は笑いながら、

「るみちゃん、あの子、神経か細いねん。あんたみたいに、ごろーんと丸太ん棒転がしたような、バリケードな神経ちやうさかい」

「じゃつかあしいわい。可憐な五十乙女つかまえて、なんちゅこと言うねん」

るみ子が吼え、鹿取が吹いた。

天狗茶屋にすれば皇帝ペンギンに会える、山へ登る楽しみがひとつ増えたなど、伸介は微かに心が浮き立つのを覚えた。ハローワークも、管轄区域からすれば同じ神戸駅の南側だろう。出頭日が同じなら、ハローワークでも会える。何か力になってやれるかも知れない。天狗茶屋を起点とした、山の仲間の広がり伝わってくる。暮れなずむ青春の残照を、伸介は、闇の底に消え残る熾きのように瞼の裏にとらえていた。陽は落ちても、まだほの明るい。この陽の名残りを大事にしよう。いや、明日になれば、陽はまた昇るのだ。夜明けとともに、新しいドラマを引っさげてやってくる。一日の終わりは、次のドラマの始まりである。そう思うとふた月前、里江の部屋で味わったあの惨めな挫折感は、不思議に和らいでいくのだった。

満天の星空である。間断なく流星が走り、おびただしい数の宝石を散りばめた大天が、雄大に語りかけてくる。伸介、これが北アルプス・鹿島槍ヶ岳の銀河系だと。

ついにやってきた、念願の鹿島槍ヶ岳。この北アルプスの名峰は、計画する度に、いつも流れてきたのだった。還暦を迎えた今日、いままさに登り詰めようとしている。積年の思いが今日かなう。伸介は、ふつつつと湧き上がる期待感を噛みしめる。

田所愛子も伸介の隣に座り、呆けたように空を眺めている。

「日本にも、まだこんな星空が残っていたんですね。信じられない。大江さん、誘って下さって有り難う。本当に来て良かった」

「これで愛ちゃんも病みつきになる、俺がそうだったからね。いっそ、うちの会に入ったらどうです」

ちよつと考えてから、そうしようかな、と愛子が言った。

皇帝ペンギンとキンジロウが天狗茶屋で鉢合わせして二年、以来、愛子は伸介の仲間とよく山へ登るようになった。六甲全山縦走を二度完走し、自信がつくと、今度は北アルプスへ登りたいと言いだした。伸介は快諾した。

小屋は超満員だった。泊まり客はすし詰め状態のまま、雑魚寝である。愛子と隣り合わせで寝たが、身体の芯が熱くなり、昨夜はとうとう一睡もできなかった。

無言のまま、星座の大パノラマに見入っていると、後ろから声を掛けられた。

「お二人さん、どないした。眠られへんの」

振り返ると、るみ子と渡辺が立っている。もう新しいシャツに着替え、登山靴を履いている。時計を見ると三時半だ。

「ごつつい星空だな」渡辺が感嘆したように言う。

「コマクサと極上の空気とアルプス銀河、三千メートル級の山でしか見られない大自然だよ。愛ちゃん、堪能したかい」

「もう一時間もこうして眺めてるんです。首が疲れました」愛子が笑いながら言う。

「あれ、小熊座やるか。あの柄杓の形してる星」  
るみ子が空を見上げ、北東の一角を指さした。

「そうだね、一番上が北極星だろう。西隣りは大熊座だと思う。熊の母子がそろって見えるなんて、ついてるよ、大江さん」

「長年待った甲斐があったな、なべさん」

「四時に出発するよ。今日は昼までにキレット小屋に着きたい。八時間の長丁場だ、けっこうきついぞ」大丈夫だ、と腰を上げた。

「昼までに小屋に入ればええんやったら、もっとゆっくりでえんちゃうの」

るみ子が言った。もう少し眠りたい、という表情だ。

「今日と明日がピークだ。明日はもっときつい。だから早めに小屋に入って、明日に備える。ゆっくりするのは明日、唐松山荘に着いてか

らだ。いいね」黙ってるみ子が頷く。

伸介は愛子と小屋に戻り、リュックを詰め直した。今日は雨の心配はなさそうだ。アイゼンと雨具とセーター、着替え類を一番下にしまふ。水を満たした水筒をヤッケの上に置き、ヘッドランプをつけた。リュックを担ぐ。十五キロ、この二日間でだいぶ慣れた。

「軽く柔軟体操をやるう」渡辺のリードで身体を揉みほぐす。アキレス腱、左右の大腿筋、両肩の筋肉と、順繰りにゆっくり伸ばしていく。「よし、出発だ。大江さん、先頭を歩いてくれ」

十分ほど歩いたところで大江さん、と声を掛けられ、振り向いた。

「誕生日、おめでとう。キレット小屋に着いたら、還暦祝いをやるう」渡辺が伸介の右手を両手で握った。るみ子と愛子もその上に手を重ね、おめでとう、と言った。

「ありがとう、あつという間だな。なべさんも、今年だろ」

「十月だ。これからが本番人生、お互い禪しめ直してかからねえとな」と肩を叩く。頷きながら、伸介は大きく深呼吸した。新しい出発だ、と自分に言い聞かせる。今日、鹿島槍を落として、その途につく。これまでと同じように、紆余曲折があるだろう。今度は正面から受け止め、精一杯に生きる。もう逃げない、そう誓った。

「大江さん、行こう」渡辺の声に、行こう、と答え、まっすぐ歩き出した。あとはもう何も考えなかった。鹿島槍、吊り尾根に向け、ぐんぐん足が出た。

夜が白み始めるころ、西の彼方に立山連峰の連なりが見え、その行く手に座りのよい鹿島槍ヶ岳の双耳峰が現れた。

あれだな、伸介は足を止め、ゆっくりと肩からリュックを下ろした。腰を落とし、登山靴のひもを固めに結び直すと、静かな闘志が湧いて来た。

「陽の名残り」(五〇枚)

大森 康宏

655-0863 神戸市垂水区塩屋北町三丁目十一の十六

電話&ファックス 078-753-5271

e-mail <omor\_i\_asakusa@yahoo.co.jp>>

六十三歳、会社員

一九九六年、同人誌「八月の群れ」同人となる。

二〇〇〇～二〇〇三年 「八月の群れ」代表

同誌に年二回、小説を発表

竹内和夫 門下生

以上 二〇〇四年八月一日現在